

DO-IT Japan REPORT 2023



「余白の価値」

三年間にわたるオンラインのみでの開催を超えて、ついに今年、現地開催を再開することができました。対面でのプログラム実施の大きな価値を、この夏、思い出すことができました。夏季プログラムは事前のオンライン学習プログラムが約1ヶ月ありますが、その後の対面・宿泊で行うプログラムは1週間程度と短い期間です。その短い対面の期間中には、スカラーやスタッフを含むすべての参加者が同じ場と機会を共有します。東大駒場エリアのキャンパスでの大学生活体験や講義・研究の体験、共催企業訪問、テクノロジーの活用をはじめとしたさまざまなワークショップやイベントなど、盛りだくさんの内容があり、参加したスカラーはいろいろなチャレンジをすることになります。

DO-IT では、2007年の開始当初から、「失敗というチャンスを奪わない」「転ぶ先の杖は出さない」「こうしなさいの前にどうしたいかを聞く」などのフレーズがあります。答えを先に出して、そこへ導くようなことはしないことを、スカラーやスタッフなどすべての参加者と、あらかじめ申し合わせています。専門家と呼ばれる多くの方々にもスタッフとして参加していただいておりますが、指導するよりも、スカラーと一緒に考えている場面の方が多くあります。初めて参加した人の中には「相手を支援できていないように思えるが大丈夫だろうか」となるとも言えない気持ちに出会う人も少なくないはずです。

私たちは皆、人生の中で迷ったり壁にぶつかることはしょっちゅうです。障害のある子どもたちや若者たちも、苦しい中でも道を見つけて、ちゃんと生きていこうとします。ただ、「ちゃんとしていること」の規範が、世の中の慣行や慣習だけに縛られてしまうと、「わたしが、どうしたかったか」という意思が見落とされ、果たして自分の自分の人生を生きようとしていたのか、誰かの望む人生を辿ろうとしているのか、わからなくなることがあります。「わたし」が肯定的に育っていくには、「あなたは、どうしたかったの」という他者からの尊重と問いかけ、そして、その時の自分と一緒に考えたり、試行錯誤してくれる人との出会いが、水や肥料のように注がれることが必要なのだと思います。

こうした学びの瞬間は、DO-ITのプログラムでも、計画されたことの中だけではなく、例えば、どこからどこかへ移動したり、場所や場面が切り替わったり、初めての人や場所と出会ったりと、プログラムとプログラムの間、余白の部分に多く生まれています。実は日頃の人生においてもそうかもしれません。小さいスケールで言えば、教室から次の教室への移動も、余白の部分と言えます。さらにもう少し大きい範囲で見ると、高校から大学へ進学するとき、学校社会から就職で労働社会へ移っていく境目などは、人生における余白の部分とも言えます。自分らしい生き方を選ぶための学びのチャンスは、そんな余白の部分に集まっています。

余白は空白ではなくて、とても中身の詰まった、学びのチャンスに溢れるものです。そのことを短い期間で体験したり確認できるのが、DO-ITの夏季プログラムなのだと思います。現地開催の復活で、私たちはこの豊かな余白に満ちたDO-ITを取り戻すことができました。社会に目を向ければ、感染症や紛争、地震や気候変動、人口減少など、私たちに降りかかる災害は止まるところがなく、予測不能な社会への不安は高まる一方です。しかし、DO-ITが大切にすべき学びの本質は私たちの足元の、この余白にあると確認することができました。これからDO-ITのプログラムに参加する子どもたちや若者たち、そしてコロナ禍中の参加だったスカラーや参加者たちとも、もう一度ここを出発点にして、さらなる学びと成長の機会を広げていこうと思いを新たにしました。

DO-IT Japan ディレクター 近藤武夫

DO-IT Japan 2023 REPORT

Diversity, Opportunities, Internetworking and Technology

巻頭言「余白の価値」	02
DO-IT Japan とは	04
DO-IT Japan の3つのプログラム	05
1 スカラープログラム	06
1-1 夏季プログラム	08
夏季プログラムを終えた 2023 スカラーの感想	17
1-2 特別聴講生プログラム	27
1-3 夏季プログラム後に行われるスカラープログラム	30
2 パルプログラム	31
3 DO-IT Japan の様々な活動	32
4 スカラーたちの活動/インタビュー	34
5 DO-IT Japan スカラーのデータ	37
6 共催・協力・後援	38



DO-IT Japanとは

DO-IT=Diversity, Opportunities, Internetworking, and Technology

DO-IT Japanは、障害や病気のある若者や子どもたちの高等教育への進学とその後のキャリアへの移行支援を通じたリーダー育成プロジェクトです。東京大学先端科学技術研究センター、共催企業・協力企業との産学連携により、2007年から活動を続けています。

DO-IT Japanでは、テクノロジーを活用して自分の特性に最適化した学び方を体験すること、大学に進学した後のキャンパスライフと自立生活を体験すること、インターンシップや海外研修への参加、オンライン・オフライン両方で行われるDO-ITコミュニティへの継続的な参加など、多様な機会提供を行なっています。こうした機会を通じて、多様な価値観を持つ大人たちや同世代の仲間たちとの交流や情報交換を行っています。これらの経験から、障害や病気のある若者は、自分に合った学び方・働き方・生活の仕方を試行錯誤するほか、障害の社会モデル、自立や自己決定、セルフアドボカシー（自己権利擁護）などの考え方を学ぶことに加えて、将来の夢の実現や、社会活躍とリーダーシップに関する学びの機会を得ることができます。

DO-IT Japanは、プログラムに参加した若者の中から、社会で活躍するリーダーが育つことを願い、活動を続けています。



DO-IT Japan2023夏季プログラム参加者集合写真

DO-IT Japan の3つのプログラム

DO-IT Japanは、「1.スカラープログラム」、「2.パルプログラム」、「3.スクールプログラム」の3つのプログラムを行っています。障害や病気のある若者や子どもたち、その家族、支援に携わる教員・学校などの幅広い層へ、インクルーシブな社会に向けた情報・機会の提供を行っています。

1. スカラープログラム メインプログラム

毎年春に
募集

障害や病気のある若者や子どもたちを対象とした参加型プログラムです。毎年春に参加者の募集が行われます。選抜者は「スカラー」と呼ばれます。スカラーは、年間を通じた様々なプログラムに、継続して参加することができます。

詳細は P6 より

2. パルプログラム 情報提供

ウェブサイト
にて登録可能

障害や病気のある本人(年齢は問いません)と、その家族を対象とした登録型プログラムです。常時、ウェブサイトに参加登録することができます。登録者は、登録者向けのセミナーへの参加、メールマガジンを講読することができます。

詳細は P31

3. スクールプログラム 環境整備

障害や病気のある若者に関わる学校・教員を対象としたプログラムです。学校内にインクルーシブな学習環境を整備することを目的とし、共催・協力企業と共に、テクノロジーやサービス・支援に関するノウハウを提供しています。

※スクールプログラムは常設プログラムではなく、不定期に実施しています。過去の活動報告は、ウェブサイトをご覧ください。



1

スカラープログラム

スカラープログラムは、障害のある若者を対象としたリーダー育成プログラムです。毎年春に、参加者の募集・選抜が行われます。2023年度は、以下の2つの枠組みで参加者の募集が行われ、プログラムが開催されました。

スカラープログラム 2023 (メインプログラム)

選抜された生徒・学生は「スカラー」と呼ばれます。スカラーは、その年度に開催される夏季プログラムに参加し、その後開催される様々なプログラムに年間を通じて継続的に参加します。彼らは、多様な障害のある仲間、障害支援の専門家など、多様な価値観をもつ人と出会い、意見交換する機会を得ます。

DO-IT Japanは、これらのプログラム参加や機会を通じ、彼らの中から社会で活躍する「リーダー」が育つことを期待しています。

特別聴講生プログラム 2023

スカラープログラムの一部に参加することができるサブ・プログラムです。選抜された児童・生徒は、以下のプログラムに参加します。

- 夏季プログラム：
 - ・特別聴講生向けプログラム：
 - A) テクノロジーコース、B) ダイバーシティコース
 - ・交流会
- 年度末までの個別相談

求める参加者像

- スカラーとしてプログラムに参加することを強く希望している
- テクノロジーを活用した多様な学習方法を学び、実践することを希望している
- 進学や就労へ向けた意欲がある
- 自分の興味や関心のある物事について探求している
- 多様性理解を広げることに関心がある、またその活動に向けてリーダーシップを発揮できる

- 特別聴講生としてプログラムに参加することを強く希望している
- テクノロジーを活用した多様な学習方法を学び、実践することを希望している



参加者

10名 (中学生2名、高校生7名、高専生1名)

A) テクノロジーコース：小学生 …… 10名
 テクノロジーコース：オンライン …… 16名
 B) ダイバーシティコース …… 8名

参加期間

選抜された年度(2023年度)から、年間を通じて開催される様々なプログラムに継続的に参加します。

実施したプログラムの内容は P8 より掲載

2023年度中 (2024年3月31日まで)

実施したプログラムの内容は P27 より掲載

共催・協力・後援

共催企業

日本マイクロソフト株式会社、P & G ジャパン

協力企業

一般社団法人コペルニク・ジャパン、オムロン株式会社、株式会社 atacaLab
 株式会社カプセルアシスト、株式会社リコー、合同会社 nicomo、GK デザイングループ
 ソフトバンク株式会社、TOPPAN 株式会社、トヨタモビリティサービス株式会社、フォナック補聴器

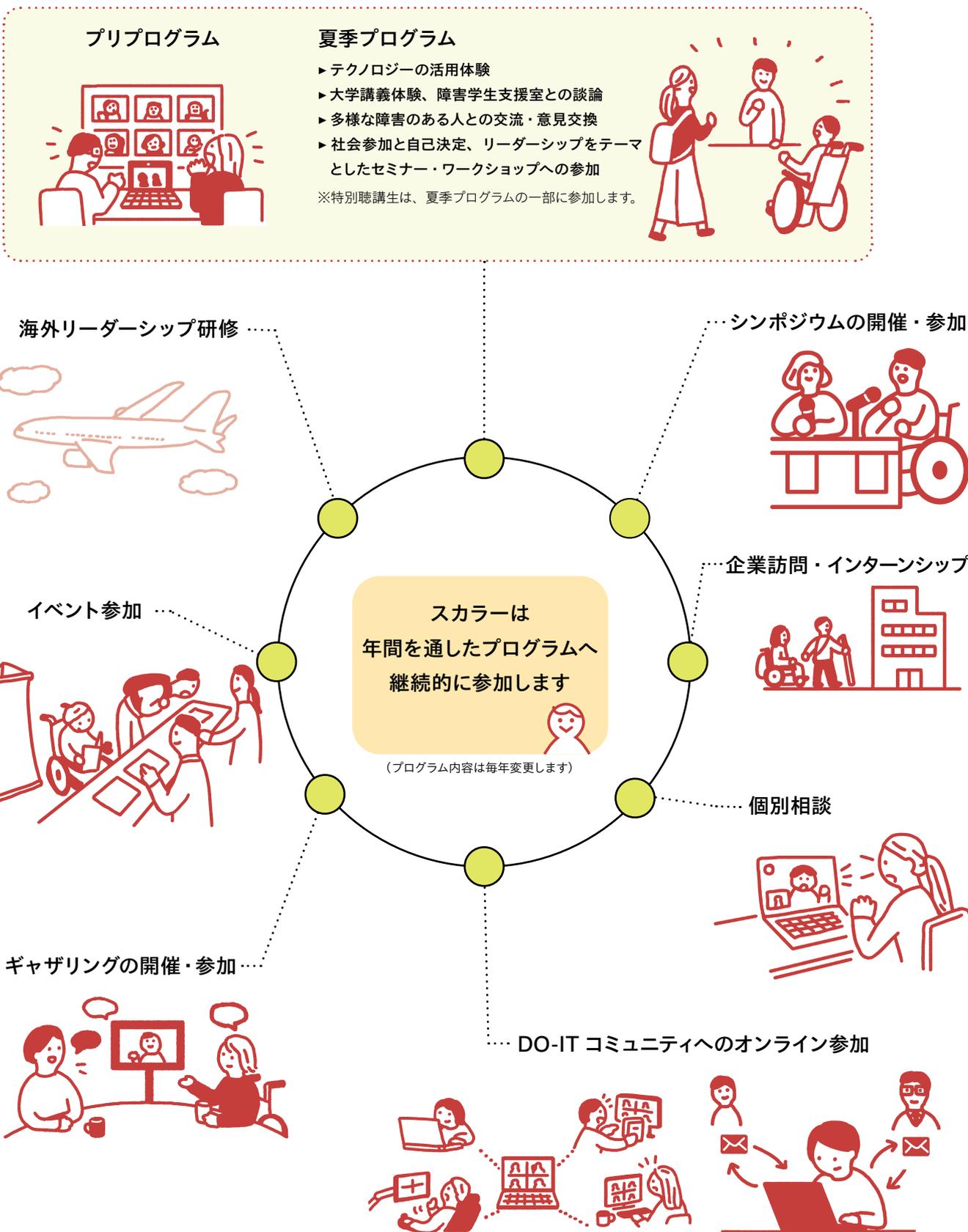
後援

厚生労働省、文部科学省

詳細は P38-39

スカラープログラム：年間スケジュールの例

スカラープログラムで、全国から選抜された障害や病気のある若者「スカラー」は、多様な価値観をもち、社会で活躍する様々な人たちと出会います。スカラープログラムは、参加したスカラーたちが将来のロールモデルを得たり、多様な価値観を知り、社会的包摂を導くリーダーシップを高め合う学びの機会となっています。



1-1 夏季プログラム

夏季プログラムは、その年度に選抜されたスカラーが初めて参加するプログラムです。「テクノロジーの利用」「自分自身や障害についての理解」「セルフアドボカシー」「自立と自己決定」をテーマとしたプログラムを開催しました。

0 プリプログラム

夏季プログラム [2023年8月6日(日) ~ 10日(木)]

1
日目

『視野を広げる』

- レセプション・プログラムガイダンス
- トークセッション「自立と依存を考える」
- ウェルカムパーティー!「話そう!大学生活」
- アイスブレイクナイト

2
日目

『大学体験/合理的配慮を求める』

- 大学を知る1「大学講義・ラボ訪問」
- 大学を知る2「東京大学のバリアフリー支援」
- 自己決定とセルフアドボカシー『「合理的配慮」を求める』
- アクティビティ「使える!楽しい!様々なモビリティを体験する」

3
日目

『最新のテクノロジーにふれる』

- マイクロソフトスペシャル講義
- テクノロジーセッション「学びの本質に迫ること」
- マイクロソフトスペシャルツアー

4
日目

『多様な価値観にふれる / 自分の意見を発信する』

- コンカレントセミナー
- 交流会 2023!

5
日目

『障害と社会を考える』

- 振り返りプログラム「自分のこれからを語る」
- 修了式 2023

プリプログラム

2023スカラーは、7月の毎週金曜日・土曜日に、オンラインで開催されたプリプログラムに参加しました。各日に設定されたテーマに基づいて、講義を受けたり、意見交換や課題を実施することで、夏季プログラム参加に必要な準備を進めました。

プリプログラムテーマ

1週目 7/7,8	【オリエンテーション】ガイダンス、テクノロジーを活用すること 【講義】高等教育における障害のある学生に対する合理的配慮を知る
2週目 7/14,15	【講義】障害の「社会モデル」を知る 【ワークショップ】自分の生活を整理する
3週目 7/21,22	【ワークショップ】どのような配慮を求めたいと考えているか?相手に伝えよう(1)(2)
4週目 7/28,29	【発表】セルフアドボカシー:合理的配慮を求める
最終日 8/4	【まとめ】夏のチャレンジを語る

[2023スカラー]



出口 優人
Deguchi Yuto



日比 まこと
Hibi Makoto



太田 莉穂
Ohta Riho



佐藤 恵陽
Sato Toshiharu



堀江 奈桜
Horie Nao



菊谷 權
Kikutani Kai



山本 麻央
Yamamoto Mao



徳富 希乃佳
Tokutomi Nonoka



井内 綾乃
Luchi Ayano



澤田 桃
Sawada Momo

視野を広げる

夏季プログラムでは、2023年度スカラー、DO-ITのアドバイザーやスタッフ、大学生チューター（先輩としてプログラムに参加する大学生）が東大先端研キャンパスに大集合！これまでオンラインだけで交流していたスカラー同士も初顔合わせです。夏季プログラムがいよいよスタートします。



レセプション・プログラムガイダンス

12:20

夏季プログラムの5日間は、一人一人の自己決定が何より尊重されます。そんな中、やりたいと決めたことに精一杯チャレンジして欲しいこと、ICTや人の支援をどんどん試してほしいこと等、共通理解を確かめました。



トークセッション「自立と依存を考える」

13:50



熊谷晋一郎
DO-ITスタッフ

障害のある若者にとって「自立」や「依存」には特別な意味があります。誰かに押し付けられる自立ではなく、自分自身で自立のあり方を決めるには、別の視点が必要です。社会モデルや当事者の観点からそれぞれの経験を話し合い、自立と依存を捉え直しました。



ウェルカムパーティ！「話そう！大学生活」

15:30



河高素子
2013スカラー

DO-ITのコミュニティに新たに参加したスカラーを歓迎するパーティ！先輩スカラーたちからは今どんな学生生活を送っているのか、リアルな日常についての話題提供も。進学後の生活についてイメージを広げました。



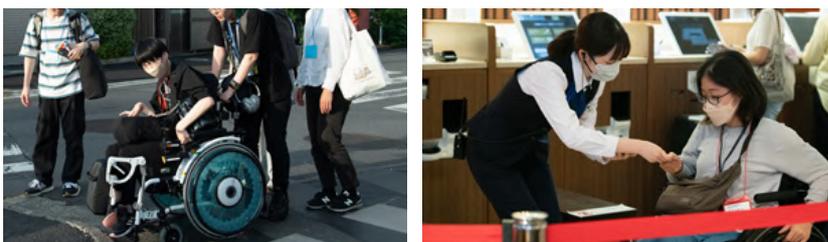
渡辺陽
2017スカラー



移動・ホテルチェックイン

17:00

移動もチェックインも自分で試行錯誤。夏季プログラムは、家族から離れ、毎日自分で通学する学生生活を擬似体験するチャンスです。



アイスブレイクナイト

19:00

1日目から盛りだくさんの内容だったプログラム初日を終え、ようやく一息。同世代で安心してお互いのことを話し合う場を持ちました。

大学体験／合理的配慮を求める

午前は、大学の研究室の現場や大学での講義を体験したり、障害学生支援の実際について学びました。午後は、合理的配慮を学校に対して自ら求めるロールプレイ! プリプログラムからの準備を実行に移します。そして夕方は、普段あまり目にする事のない世の中の様々なモビリティ (特殊な車両、車いす等) を実際に体験しました。

7 大学を知る1「大学講義・ラボ訪問」

9:30



門内靖明
東大先端研
准教授

身体情報学分野・稲見・門内研究室

身体情報学分野。人間拡張工学や主観的体験の共有・伝達技術、知覚・感情体験の設計、ワイヤレスインタラクション等についての研究開発に取り組む研究室。



研究室
ウェブサイト



VRにより高齢者施設で暮らす人々と世界旅行を共に楽しむプロジェクトや、テラヘルツ技術により非接触で人体の動きを捉える技術開発、腕の装着脱・交換を可能にする「自在肢」というロボットアームシステム等…人間の感覚・運動・知的処理を工学的に拡張・補償する研究について、実際の機器に触れながら体験的に学びました。



7 大学を知る2「東京大学のバリアフリー支援」

11:30



切原賢治
東京大学
バリアフリー
支援室



支援室
ウェブサイト

東京大学には、障害のある学生を支援する専門の部署があります。そこで働く教職員の皆さんから、東京大学の支援の具体例を話題提供いただきました。大学での「障害学生支援」と呼ばれる支援の取り組みは、全国の大学で広がっています。大学で数多くの障害学生が合理的配慮を得て学んでいる状況について学ぶ時間となりました。



7 キャンパスランチ

12:15

キャンパスには食事の選択肢がいくつも。将来の学生生活への想像が広がります。次の予定を考えつつも、楽しい時間を過ごしました。





自己決定とセルフアドボカシー『合理的配慮』を求める」

13:30

「セルフアドボカシー（自己権利擁護）」として、進学後は大学に対して合理的配慮を求めたり、自らの意思やニーズを伝える場面が増えます。支援は充実しつつありますが、待つだけでは自分が本当に求めている配慮がいつまでも得られないことも。プリプログラムで考えてきた「自分が本当に求めていることってなんだろう？」を形にして、大学の教職員に伝えるロールプレイは、夏季プログラムのハイライトです！



アクティビティ「使える！楽しい！様々なモビリティを体験する」

17:20

私たちにとって「移動」はいつも、大きな悩みの種です。しかし、移動を支えるテクノロジーには大きな可能性があるのです。どこにでも車いすごと移動できるリフトカー、悪路を乗り越えるオフロード用車いす、視覚障害のある人とともに競技参加できるタンDEM自転車…などなど、見たこともないような、そして障壁を超えるだけではなく、移動そのものを楽しいものに変えてくれる乗り物は世の中にたくさん！



平松 竜司
東京大学

田村 達彦
合同会社 nicomo

高橋 雅樹
トヨタモビリティサービス株式会社



夏季プログラム

3

日目

2023.8.8 Tue

最新のテクノロジーにふれる

テクノロジーは教室や職場など場面でも、障害により何らかの制限に直面している人々を助けるパートナーになります。しかし「支援技術(Assistive Technology)」としてのICT活用には専門知識やコツも必要。独特の設定や思わぬ使い方、特殊な機器やアプリの併用を個々のニーズに合わせて体験しました。

共催プログラム

マイクロソフト株式会社



10:30

マイクロソフトスペシャル講義



野崎弘倫
日本マイクロソフト株式会社
技術統括室 CTO

マイクロソフト社CEOサティア・ナデラさんの「AIの黄金時代が到来し、我々が把握している仕事を再定義するだろう」という予測があります。CTO野崎さんから、AIが変える未来の働き方についてご講義いただきました。DO-ITでも多くのAI技術を、読む・書く・聞くことに関する学習支援に役立っています。さらに、考えること・提案することの支援と共に働くパートナーとしてのAIが変える私たちの将来について、議論を膨らませました。



13:30

テクノロジーセッション「学びの本質に迫ること」

「やりたいことを把握してやりとげる方法」

リマインダーやスケジューラーは現代人にとって便利なツール。やるべきことを適切な場面で思い出し・実行に移すには、そのツールを活かすための考え方がさらに大切。頭の中のやるべきことをうまく取り出して実行につなげる技術を体験するワークショップに参加しました。



「テクノロジー・フィッシング」

市販されているICT機器は、多数派の人にとって使いやすく作られています。しかし、肢体不自由などのある人にICTがフィットするように調整する方法も本当に様々な存在します。ICT環境を自分にとって楽に使える状態にするワークショップに参加しました。



16:30

マイクロソフトスペシャルツアー

マイクロソフト社内には、テクノロジーを活用して働くこと・活躍することを助ける環境や設備が充実!スカラー全員で社内ツアーを行いました。



17:00

自由行動

将来の大学生生活の疑似体験をするなら、自由な時間をひとりで/誰かとエンジョイするのが一番! 行きたい場所を自由に決めて出かけました。

過年度プログラム

初年度の夏季プログラムでテクノロジー利用やセルフアドボカシーについて学んだスカラー達。今夏は並木研究室「インクルーシブデザインラボラトリー」と合同で実施したプログラムに参加。インクルーシブな実験への参加を経て自分自身に必要な配慮について深く考えるきっかけにもなりました。

「インクルーシブラボ」で生物実験タイム!

8月7日(月) 12:35-13:15 オリエンテーション、自己紹介、実験時に必要となる配慮について
 13:30-16:30 実験1: 昆虫触角の匂い応答の計測
 17:00-17:30 振り返り
 8月8日(火) 10:05-12:30 実験2: 植物生態電気の計測
 14:00-16:30 報告、レポート、発表、振り返り



安藤規泰
前橋工科大学
工学部学術研究院
生命工学領域
准教授



並木重宏
東京大学先端科学
技術研究センター
准教授



工藤怜之
東京大学先端科学
技術研究センター
特任助教



加藤 寛治
東京大学先端科学
技術研究センター
特任研究員
GK 設計



尾上弘基
東京大学先端科学
技術研究センター
学術専門職員



[参加者の感想]



正野 寛一郎
2021 スカラー

自らの手で楽しめなかった実験室での「生物実験」に本気で向き合い、求めるべき配慮について理解できました。いままで、実験とは周りの人が行う様子を見学するものでした。

今回は、人に容易に支援を求められる環境がありました。また、机や洗面台の高さを変更でき、緊急用シャワーも車椅子の人が利用できるようになっていました。



加藤 弘絵
2020 スカラー

正に「新発見」でした。高校の実験では、障害による困難等で時間が掛かり、授業の速さについていくのがやっと…。インクルーシブ・ラボでは高さ調整可能な机や流し台。障害を理解し支援してくれる方々の存在。まさにインクルーシブでした。進学等で重要になる「自分の困難や障害」への認識、「自分の個性」を新発見できました。



佐藤 殊菜
2021 スカラー

実験の際に見えにくさによる困難さがあり、視覚補助具を使用し参加した経験はありましたが、1人でできる作業には限りがありました。今回、実験時に初めて見る視覚補助具も体験して、ほぼ全ての作業が1人ででき、とても達成感がありました。適切な合理的配慮を受ければ周囲と同様に実験を行うことができることを実感しました。



飯野 あすか
2019 スカラー

参加前は実験動作に苦勞すると予想していたが、一番苦勞したのは実験動作の手本を見ることであった。テーブルに近づき前屈みの姿勢を維持するのが大変であった。しかし、手本をカメラに映して、手元のiPadで見ることで解決できた。「実験の授業での自分の困り事と、それに対する解決策」を大学入学後、生かしていきたい。

多様な価値観にふれる / 自分の意見を発信する

大学の講義では、私たちは日常を離れた新しい価値や知識、技術を学びます。そこで学んだことから自由を得て、私たちは自らの将来や社会のあり方を広げたり変えたりしていくことができます。4日目の「コンカレントセミナー」では、国内外で活躍する講師を迎えた講義に参加し、大学での学びの体験と自らの価値観を広げることを目指します。

10:00

コンカレントセミナー1

〈1〉あなたが世界を変えるにはテクノロジーで変える国際社会課題



高田将人
株式会社リコー

世界の途上国が抱える社会課題を革新的なテクノロジーで解決するため、その現場に飛び込むコペルニクと、遠く離れた場所の臨場感を伝える360度カメラThetaを開発したリコー社から講師をお迎えし、協働の実際について学び、社会変革について議論しました。



天花寺宏美
コペルニク



〈2〉自分の体の声を聴く



熊谷晋一郎
東大先端研

自分の身体は、いつも正直に今の状態を語ってくれるわけではありません。自分の調子は予測できると思っていたら、突然、極限状況になった経験のある人も少なくないのでは？自分の身体の声に耳を澄ませて、少しずつ打ち解けていくことについて話し合いました。



〈3〉自由と安全配慮の狭間で



土島智幸
稲生会

教育や医療は「私たちへの安全配慮義務があるため」、私たちの選択や自己決定に介入しがちです。一方で、単なる安全配慮に止まらず、私たちの選択と自己決定を支えようとする人々も。自由と安全、その現実と理想について、常識にとらわれず話し合いました。



〈4〉社会連携という働き方～大学(知)と社会をつなぐ～



渡部賢太
東京大学基金



井上清治
東京大学基金

大学での研究を、社会の発展や社会課題の解決につなげる期待は大きい！ただそこでも不可欠なのは研究財源です。大学知と社会をつなぐ上で、大学ファンドレイザーの役割、そこで必要とされるキャリアやスキルを知り、社会課題の具体的解決について議論します。



西大治郎
東京大学基金



古林祐佳
東京大学基金



13:00

コンカレントセミナー2

〈1〉企業の中に、障害のある人の働く場を生み出す人たちは、どんなことを考えて何に取り組んでいるのか？



藤本慎也
オムロン株式会社

障害者雇用の黎明期を支えた歴史を持つ企業では、ともに働く場を生み出すために、何にどのように取り組んでいるのか？オムロンの企業活動の中心である工場・製造現場を例に、近未来のテクノロジーと人間の高度な協調によるインクルージョンについて議論しました。



宮地功
オムロン株式会社



荒井裕晃
オムロン京都太閤株式会社



〈2〉医療との付き合い方



埴田羅勝義
徳島文理大学

幼い頃から医療を利用していると「医療は保護者が考えたり管理するもので、自分自身とは縁遠いもの」という印象が強い人も。進学のために地元を離れたり、国内外へ出かけたりと、将来の活躍を広げる上でも大切な医療との付き合い方を、様々な視点から議論しました。



〈3〉見えない障害とカミングアウト



飯野由里子
東京大学

「見えない障害」があると、障害があると伝えても信じてもらえない経験をしがちです。外見からわかる障害にも、外見だけでは見えない状況があったり、病状の進行や変動で自分でも見えなくなることも。カミングアウトをめぐる経験について相互理解を深めました。



〈4〉障害学生支援のほんとのところ



村田淳
京都大学

大学での障害学生支援とは?大学ごとの違いは?なぜ障害のある学生本人が期待した支援と違うことが起こる可能性があるのか?そんな時、どんな考え方や行動ができるのか。一般的な考え方やノウハウにとどまらず「障害学生支援のほんとのところ」を紐解きました。



〈5〉障害者権利条約が教えてくれた、自分を大切にできる権利



川端舞
つくば自立生活センターほにやら / DO-IT2008 スカラー

障害のある仲間と国連の障害者権利条約を学ぶと、どんな障害があっても配慮を受けながら普通学校に通う権利があることを知ることができます。一人ひとりが持っている権利や、その権利を妨げているものについて、講師とスカラーが一緒に考える講義を行いました。



15:00

コンカレントセミナー3

〈1〉社会的処方とポジティブヘルス



堀田聡子
慶應義塾大学 SFC

医師や薬だけではどうにもならない健康の社会的決定要因へ働きかける「社会的処方」。その重要な哲学は「人間中心性、エンパワーメント、共創」です。英国や日本の動向を学んだうえで、新しい健康の概念「ポジティブヘルス」について参加者同士で対話しました。



〈3〉支援者とアドボケイトの違い



奥山俊博
東大先端研

社会的排除を受ける人を応援する人を指す言葉の一つに「アドボケイト(権利擁護する人)」があります。「将来は支援者になりたい」と考えるスカラーが今考えている「支援」とは何なのか、「誰かが誰かの権利擁護をすること」という切り口から一緒に考えました。



富岡美紀子
明治学院大学



〈2〉調べる楽しみと、調べ物を取り巻く社会の壁をなくす仕事



渡辺由利子
国立国会図書館

国立国会図書館は日本国内で流通するあらゆる出版物を所蔵!通常の印刷物利用が難しい人のためのデジタル資料&検索方法や、障害のある図書館員が活躍する事例も。「調べる」をテーマに図書館サービスを知り、より良い読書や調べ物のあり方について議論しました。



〈4〉『自立生活』再考、欲望のイマジネーション



慎允翼
DO-IT2013 スカラー

中高生のスカラーたちが思い描ける「自立生活」は、先輩の眼には物足りない...!講師・先輩スカラーが自らの「自立生活」事例を紹介した上で、スカラー自身もまだはつきりしない本当の希望に問いかけ、形を与え、自立生活を通じて実現する方法を検討しました。



17:45

交流会 2023!

交流会は、夏季プログラムの全ての参加者が大集合する機会です。自分が愛してやまないものやユニークな経験を発表する企画「ハイパープレゼンテーション」が、会場に集まった人々の多様性を描き、交流に花を添えました。



障害と社会を考える

あつという間の5日間。プリプログラムから考えると1か月以上になりますが、それもまた、あつという間の出来事。数えきれない新しい出会いと体験に溢れた夏季プログラムの最終日です。

振り返りプログラム「自分のこれからを語る」

10:00

息つく間もなく過ごした5日間を、今年度新しく参加したスカラー全員でゆっくり振り返る時間です。スカラーたちのこれからの活躍の土台となるため、この夏の学びを力に変えるよう、学んだことや新しい気づきをじっくりと振り返りました。



修了式2023

12:20





出口 優人
Deguchi Yuto
中学生/広島県

失敗があっても成功に変えられるように

DO-ITでの体験を通じて、特性は違うけれど、一緒に学んで乗り越えていく仲間と出会いました。感覚の困りごとで共通の話ができたり、自分の知らない困りごとについて知れました。東京で対面で体験できたからこそ、皆との距離が縮まりました。山手線で人混みを移動したり、プログラムが終わった後の自由時間を一緒に過ごしたりした時間が1番打ち解けることができました。今までどうやって配慮を受けてきたなど話し合え、励まし合う存在ができました。

「障害者権利条約が教えてくれた自分を大切にする権利」のセミナーを受けて、今、私が配慮を受けられているのも、過去にいろんな方が方法を考え、それを支えてきた人たちのおかげで、後に続く私も配慮が受けられていると感じました。読み上げは必要ないと思っていましたが、プログラム後、検査をして、自分が読めていないことに気がつきました。今回のセミナーが、自分を知り、必要な配慮をお願いするきっかけになりました。中学校にテストの読み上げの合理的配慮をお願いしたら、建設的な話し合いをしてくださり、次のテストに向けて動いてくださることになりました。ICT利用や読み上げなどを認めてもらい、とてもありがたく思っています。

私が一番心に残ったことは、初日の熊谷先生のセミナーでした。その中で印象に残った言葉が「自立とは=依存先を増やすこと」です。今までの私は、人と関わるのが苦手で、自立とは、自分で何でもできるこ

とだと思っていました。実は、このセミナーは事情があって、別室でオンラインで受講しました。広島から前泊したホテルまでは、学校の先輩や、以前から連絡を取っていた(初対面)先生にお願いして同行してもらいましたが、最寄駅から先端研までは1人で行動しました。集合場所を勘違いしてしまい、1時間半、1人で歩き回りました。暑さも加わり、体調を崩してしまったのです。別室でセミナーを受けながら、お会いできることを楽しみにしていた熊谷先生に直接、会えなかったことを残念に思い、東大前まで付き添いをお願いしていたら…通りがかった人に声をかけられたら…と思っていた私には、「依存先を増やすこと」という言葉を痛感したのです。

今後は、自分の特性や苦手なことについて、もっと受け入れたり、状況が悪化する前に人に頼ったり、カバーできる工夫を大事にしたりしたいと思います。失敗があっても成功に変えられるように、いろいろな体験を積み重ねたいです。





日比 まこと

Hibi Makoto

中学生 / 東京都

当事者だからわかる目線

私はこの夏季プログラムを通して、配慮を求めることの大切さと自分の視野の狭さを実感しました。今までの私は配慮を求めても中々学校側が理解してくれず心のどこかでは、私が配慮を求めることはただのわがままなのではないか・理解を得られないなら我慢するしかないと思っていました。でもこのプログラムでセルフアドボカシーについてや合理的配慮を求めることは全くわがままなんかではなく一人一人が持つ権利だということを学び自分の中での配慮を求める時の後ろめたさというものが一気に消えていきました。また、自分の中で沢山の人の助けをもらって配慮をうけても成績が上がらなかつたりしたら凄く申し訳ないなという気持ちもあったのですが、合理的配慮は能力に下駄をはかせるものではなく、自分にとって最適の勉強環境をつくるもの。という言葉聞いてここでも自分の申し訳なささが消えていったように感じます。

話は変わりますが私は今まで自分の視野は広いほうだと思っていました。自分自身の発達障害という特性を理解していたし、発達障害以外の障害などへも偏見の目はないと思っていました。でも、実際に自分とは違う障害をもつ人と話してみても自分にはまだまだ偏見の目があることを知りました。このプログラムが始まる前は車椅子を使っている人は自分とは違う悩みを持っているものだろうと考えていて、自分とはどこか違う人として捉えてしまっていました。しかし、実際に話してみても抱える障害は違えど悩みや考えていることには共通点が沢山あるなと思いました。自分があなたの立場だったら

こうだったかもとお互い相手の困り感を想像しながら話したことで得た学びも沢山あったし初めて自分とは違う障害の人と分かり合えてすごうれしかったです。

プログラム後に何人かのスカラーのみんなと新宿でプリクラを撮ったことも凄く印象に残っています。自分が普段何気なく使っていたプリクラも沢山の人の困り感を聞いてからだの見方も変わりました。そもそもゲームセンターにエレベーターはあるのかから始まり、新宿駅の小さすぎるエレベーターにみんなで怒り、車いすメンバーが車いすから降りている間にプリクラの撮影が始まってしまって2回お金を払うことになったり。私が思っていた何倍も今の日本は街から教育まで多数派にだけ優しい社会になってしまっていると強く感じました。そしてこの問題は絶対にほっといたらいけないものだとは思っているので、今後も当事者だからわかる目線や23スカラーの仲間と疑問を疑問で終わらせないように活動していきたいです。





太田 莉穂
Ohta Riho
高校生／奈良県

本当はそうしたいと思っていたこと

私がDO-ITに参加するのは2回目です。1回目は中学3年の時に、学校から発達特性に対する環境調整が受けられないことが原因で、環境不適應を起こし、自分にも周りにも絶望していた時に「この状況をなんとしても打破したい」と思い特別聴講生として参加しました。その際、スタッフの先生やスカラーの先輩たちからの話を聞いたおかげで、自分が適應できる環境を整備してくれる学校に進学するという決断をすることができました。

今回2回目の参加を決めたのは、大学進学を決めたのをきっかけに、今までとは違う環境に進むにあたり、「自分はどのような配慮が必要なのか」を考えたいと思ったこと、「自分以外の障害を持つ人たちがどんなことを感じたり考えたりして過ごしているのか」を知りたいと思ったことが理由です。

私が夏季プログラムに参加して感じたことは、プログラムに関わるスカラーやスタッフの方々が自分たちのやりたいように考えて、自由に振る舞える空気があることでした。普段は自分の障害や本当にやってほしいことを、あまり主張せずに押し殺して生活を送り、何を実行するにしても両親や学校の先生をはじめとする周囲の大人の意見を聞かないと行動することが難しい私にとって、DO-ITのプログラムの中で、自分のやりたいことを自分で考えて実行することは難しいことでした。

けれども、夏季プログラムにスカラーとして関わっていく中で、「私は周りの騒音に気が散って疲れてしまうから、ノイズキャンセリングヘッドフォンを使って講義に参加した方がやりやすい」という発見ができたり、「疲れた

から机に伏せた状態でプログラムに参加したい」や「空腹だと注意散漫になるからおやつを食べながら話を聞きたい」というやりたいことが通ったりするなど、自分が本当はそうしたいと思っていたことを周囲に気にしすぎることなくできることが、私にとってすごくしやすい時間になりました。

また、自分以外の障害や特性をもって生きている人たちとプログラム期間中に今まで経験したことを話したり、聴いたりなど交流することによって、「自分はひとりぼっちじゃない、仲間がいる」と強く感じるすることができました。

私は、DO-ITのプログラムにスカラーとして参加するまで、合理的配慮をわざわざやらせようことや自分の障害に対して周囲に申し訳ないという負い目を感じていましたが、プログラムに参加する中で、「合理的配慮は他の健常者の人たちと同じように生活したり、勉強したりするためにするために行う、個別性の高い合理的な環境調整のことである」ということを知り、「自分のすごくしやすい環境にするために自分の主張を通していいんだ」と思えるようになり、これからは自分らしい挑戦をすることでDO-ITで学んだことを活かしていきたいと思います。





佐藤 恵陽

Sato Toshiharu
高校生 / 東京都

自分の力をきちんと発揮するために必要なもの

僕はこの夏季プログラムを通して自分にちょっと自信が持てるようになったと思う。それはいろんなことに挑戦してみたり、いろんな考え方を知ったり、いろんな方々と関わることができたからだ。

この夏、僕にとっての一番の挑戦は親から離れて過ごすことだった。行きの電車から一人で乗ってみて不安とか上手くいかないこともちょっとあったけど、なんとか到着することができた。また、日中も初めて会うアテンダントの方々に自分がしてほしいことをいろいろ伝えて、こうしてほしいときちんと説明することでそんなに苦もなく過ごすことができた。一人でも意外となんとかなりそうだと思うことができた。

次に障害ということについてや障害者のことについて学ぶことができた。その中で二つ特に印象に残ったことがある。一つ目は障害の社会モデルだ。僕は今まで身体を動かしづらいという身体的特性があるから障害をもっているということになっていてと思っていた。しかし、障害の社会モデルによると障害というのは個人の心身機能の障害だけでなく、社会的障壁によっても引き起こされているという。これにはとても納得できた。僕は電動車椅子を使っているのだから、階段は登れないが、スロープやエレベーターがあれば自由に動き回れるということは学校生活でもよく感じていたからだ。つまり、心身機能に問題があってもそれを障害にしない社会環境があればその部分では障害をないものにできるということだ。

二つ目は、障害の有無に関わらずすべての学生に学ぶ権利があるということと合理的配慮は学ぶ権利を保証するためのもので自分の力をきちんと発揮するために

必要なものであるということだ。僕は今の学校生活で特に不便に感じていることはないが、他のスカラーの方の困っていることの話を知っていると「なんでその部分での配慮を受けられていないのだろう」と思うことがいくつかあった。中にはテストという自分の力を試す機会がほしいような合理的配慮が認めてもらえず自分の力が出しきれていないと感じている人もいた。すべて学生は等しく学ぶ権利を持っているので心身機能にどんな障害を持っていても学校は学習面での障害を取り除かなければならないはずなのに。

これらの知識は僕にやって欲しいことはどんどん言っていた方がいいなと改めて思わせてくれた。それによって障害がいくらかなくなったり、自分の本来の力を発揮できるかもしれないからだ。

最後に、とりあえずやってみることって大事だなと思った。僕がDO-ITに申し込んでみようと思ったのも、母に勧められてHPを見てみたらなんとなく面白そうだったからだ。これは保守的な僕にとってとても大きな決断だった。とりあえずの決断だったが結果的にとてもいい決断となってくれたと思う。いい機会を逃さないようにこれからはとりあえず挑戦してみることも大切にしていきたい。





堀江 奈桜

Horie Nao
高校生／兵庫県

自分から伝えていこう

私は、DO-IT Japanに参加して学んだこと・変わったことがあります。

1つ目の変わったことはDO-IT Japanに参加する前の私は、本当は話すことが好きなのに滑舌が悪く、顔が引き攣る為知らない人に何か話すときはいつも親に頼ってばかりでした。1番初めのプリプログラムでみんながしっかり自分の意見を発言していて、「これから私もみんなのように伝えたいことちゃんと伝えることができるかな」など不安でした。でも2回目以降からみんなよりは発言することはできなかつたけど、少しずつ徐々に自分から発言できるようになりました。

合理的配慮を伝えるプリプログラムでは時間内に発表することができず焦ってしまい、「みんなは落ち着いて発表できていたのに全然私はできなかつた」と思っていました。発表が終わった後、「分かりやすかつたよ」「私も共感できた」など言ってもらい、「夏季プロではもっと分かりやすく発表しよう」と前向きに考えることができるようになりました。夏季プロが始まったその日からヘルパーさんや駅員さん、スタッフさんに自分で伝えないといけなかつたので私の滑舌が伝わるか心配でしたが、どの方も聞き取れるまでしっかり私の話を最後まで聞いてくれました。プログラム期間中は、毎日のように発表があったので私は滑舌のことがあるため毎日緊張していました。「合理的配慮を求める」のスライド発表の日、早口になり聞こえにくいこともあったのですがみなさん最後まで私の話を聞いてくれて、発表が終わると、「堀江さんの寄宿舍や学校の体制を変えていこう!」「なおさんは間違っってなんかない」「十分聞き取れたよ」など嬉しい

言葉を言ってくださり、「私が思っていたことは間違っってなかつたんだ」「滑舌が悪くても十分伝わったんだ」と自信がつかしました。その日から私は今まで以上に誰に対しても滑舌など気にせず話せるようになり、「ありのままの私でいいんだ」と思うことができました。これからは「親に頼らず自分から伝えていこう」と思いました。

そしてもう一つ変わったことは「見えない障害」の方達と交流を持てたことです。いろんな「見えない障害」を持った方達の困っていることや悩んでいることを聞いてすごく勉強になりました。これからはもっと見えない障害やいろんな障害を持った方達と出会い視野を広げていきたいです。

最後に私がDO-ITに参加して学んだ事は「健常者だけの世界じゃない、障害を持っていてもリーダーになれる」という事です。私は今まで障害者は健常者と違いできることは限られているので、どこか引け目を感じていました。でも今は、障害なんか関係ない、障害を持っていても活躍して自由に生きる権利があると思えるようになりました。障害者でも生きやすい社会になるよう、健常者や政府に障害のことをもっと知ってほしいです。そのためには障害者から発信していく必要があると私は考えます。





菊谷 權

Kikutani Kai

高専生 / 東京都

様々な人に助けてもらうことで話すきっかけになった

私にとって5日間のプログラムは非日常的な経験の連続だった。ホテルの宿泊や公共交通機関の一人での移動など初めての経験があったこともあるが、一番大きい点は、自分を取り巻く物理的・心理的な環境が自分の生活と異なっていたことだと思う。

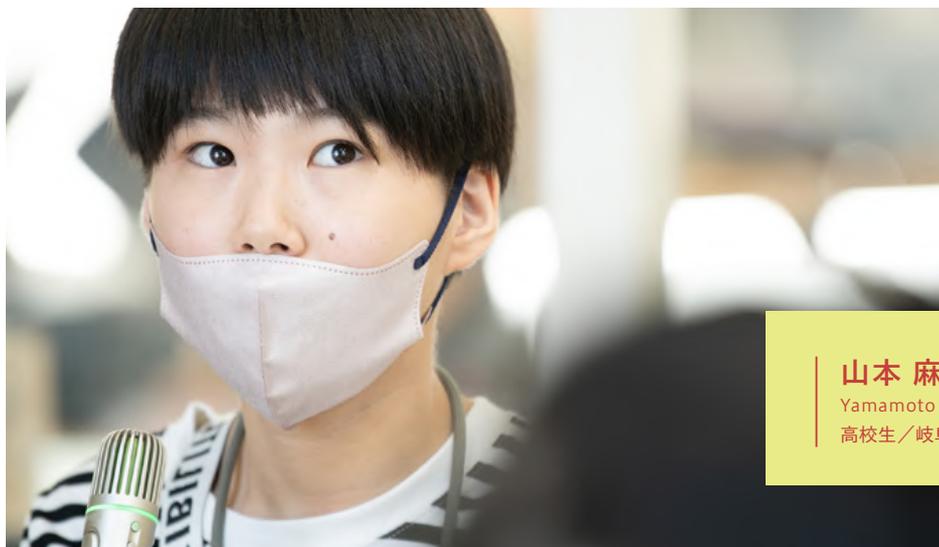
私は生まれつき肢体不自由を抱えているが、幼稚園の時から今までずっと普通級に通っていた。私にとって、健常者に囲まれた生活が日常であった。幼稚園や小学校では、友達と壁を感じずに接していて、助けを求めることができていた。しかし、中学校や高専になると、周囲との壁を感じ、助けを求めるのを遠慮するようになり、疎外感を感じ、居心地が悪くなってしまった。また、普通級であったために障害を持った年代と関わる機会が少なく、障害ならではの悩みを共有できないことでずっとモヤモヤしていた。

そんな私にとって、障害を抱えた年代と障害についての理解がある健常者に囲まれた環境で過ごした5日間は、安心できる居心地の良いものであり、周囲との壁を作らずに年代と接することができた。また、プログラム中は普段の生活より自由に行動でき、様々な人に助けてもらうことで話すきっかけになったと感じる。DO-ITは「先回りの配慮・手伝い」を極力避け、スカラーの自己決定を優先させる方針がある。家では自分のことを理解している親が手伝ってくれ、学校では合理的配慮をもとにした支援があったため、助けを求めなくても手伝ってくれる環境だった。プログラム前までは過ごしやすい環境に満足していた。しかし、プログラム中、一から必要な配慮・支援について説明しながら生活していく中で、日

ごろ当たり前のように支援してもらっていたことの中に、実は自分で対応可能なものがあることを知り、過度な支援があったことに気づくことができた。周囲からの支援は自分にとって必要なものであり、とてもありがたいものである。しかし、過度な支援は私の自己決定の機会を奪い、自立することを難しくするのではないかと思う。1日目の「自立と依存」の講義で、助けを求めることは依存先を増やし、自立への第一歩になると学んだ。将来のことも考えて、自身が周囲に対しついていた壁を取り払い、学校での自分の「依存先」を増やしていきたい。

今回の現地開催で分かったことは、DO-ITのプログラムはいろいろな人たちに支えられているということだ。スタッフの方々は夏季プログラムの計画や機材の準備、チューターさんたちは講義中にヒントになるアイデアを与えてくれた。ホテルの宿泊はアテンダントさんのサポートがなければできなかった。ツーリングアクティビティやプログラム中に様々な機器を試せたのは、協力企業があつてのことだ。夏季プログラムに関わっていただいたすべての方々に感謝します。5日間支えていただき、ありがとうございました。





山本 麻央

Yamamoto Mao

高校生 / 岐阜県

自分のペースで色々なことに挑戦していく

この夏、たくさんの人と出会った。本当に良かったと思っている。夏季プログラムに参加するまでの1ヶ月間、私は先端研での出会いにワクワクしていた。しかし、初対面の人に必要な助けを上手く伝えられるだろうか、何かトラブルが起きたらどうしようなどと不安は尽きなかった。夏季プログラムの後、その不安は私もできる!という自信に変わっていた。それは人と出会い、話す中で、考え方に変化が生まれたからだ。具体的に2つある。

1つ目は、依存先を増やすことが自立であるということだ。地震の時に健常者も避難手段という依存先を求めている状況を見て、健常者も堂々と頼っているのではないかと思ったという熊谷先生の経験談を聞き、自立の本当の意味が腑に落ちた。私は今まで自立のために1人でできることを1つでも増やそうと頑張っていたが、自分1人で難しいことは頼ればいいんだと気持ちが楽になった。

2つ目は、合理的配慮は遠慮せず求めていいものであるということだ。私は配慮を求めることにどこかで申し訳なさを感じ、大学側の負担が少しでも減るように、私が挙げた配慮内容の選択肢から大学側にとって都合のよいものを選んでもらおうと考えていた。先輩からのアドバイスで、授業中の録画と代筆(私が挙げた選択肢)の2つは達成されるニーズが違うことに気付いた。配慮内容を指定して伝えないと、配慮が得られたとしてもそれは自分にとって「合理的」ではなく、学びづらさが残るかもしれないと思った。

プログラム以外の時間には、人の力を感じた。周りの人があたたかく接してくださったので、必要な助けをはっきり伝えることができた。また私は夏季プログラム

期間中にSuica契約を自己決定した。その時もアテンダントさんは、自己決定に慣れていない私を急かそうとせず私に合わせてくれた。コンカレントセミナーで議論したアドボケートとは、私のやりたいことができるようにサポートしてくれたアテンダントさんのような存在を指すのだと身を持って感じた。

そして、23スカラーの存在。スカラー同士で助け合いながら夕食をとって、何かをするとき「介助」と同じくらい「助け合い」も大切だと感じた。プログラムでは23スカラー一人一人が自分や周りの環境を変えようと、考えを自分の言葉で表現していた。私も表現力を磨かなければと刺激をもらった。私はこれから、自分のペースで色々なことに挑戦していく。互いに共感、刺激しあえる仲間がいる私は、壁にぶち当たったときもきつと乗り越えていけるだろう。

スタッフやアドバイザーの皆様、アテンダントさん、チューターさん、23スカラー、スカラーの先輩方、東京に送り出してくれた家族、学校の先生のお陰で私は一生忘れられない経験ができました。本当にありがとうございました。





徳富 希乃佳
Tokutomi Nonoka
高校生／東京都

全部自分でやらなくていい

私がDO-ITで得たもの。ここには書ききれないほどたくさんあります。自分にはなかった考えや視点、新たな気付き、仲間、そして居場所。

「障害名はチケット」自分の持っている障害の名前は、普段はしまっておいて、必要になったら提示すればいい。そう話していた人がいました。障害名って言っても言わなくてもいいんだ。そう思いました。私は今まで、自分の障害を隠している自分をどこか悪者のように思っていました。世の中には障害を公表して進み続けている人や、障害を公表せざるを得ない人もいるのに。そんな中で自分が障害を隠していることをずるいことだと捉えていましたが、そう捉える必要はないと知り障害を隠す自分も肯定できるようになりました。

次に、「障害のある人を支援する」ということについてです。障害者支援とはこれほど多岐に渡るのか、こんなにもたくさんの人々がそれぞれの分野から障害のある人を支援しているのだと気がつきました。DO-ITにはICTを通して障害児の学習をサポートしている人、IT機器を使って人々をより暮らしやすくしている人、不安や困難を心理的にやわらげる方法を知っている人、病院で障害や病気を持つ人を支えている人、社会福祉や社会学という側面から支援をしている人、家族に障害を持つ人がいる人など、たくさんのプロフェッショナルがいました。私もいつか、私だからこそできることで障害のある人を支援したいという思いがこのプログラムを通してより強くなりました。

また、苦手なことは分担すればいい。一見当たり前のことのように思えますが、私がこれを実感できたのは

夏季プログラムが初めてでした。車椅子が入れるように椅子や机をどかすのは私がやればいいし、Wi-fiのパスワードのようなアルファベットや数字の文字列は他の人に読み上げて貰えばいい。全部自分でやらなくていい。そんな当たり前のことに気がつくことができました。

それから、WISCなどの検査結果を見せ合って共感できたことです。「私もそれ苦手だよ!ほら!」今までこのような体験をしたことがなかった私にとってこの出来事は、まるで1人果てしない砂漠を彷徨っていた時に急に味方が現れたようなものでした。

夏季プログラムが終わり、日常生活に戻った私は、以前には気がつかなかったことにも気がつくようになっていました。この通路は狭いけれど車椅子は通れるかな。このフォントは読みづらいついかな。いつのまにか、車椅子だったら、みんなだったらどうだろうと考えるようになっていました。車椅子の友達と遊びに出かけることも私の日常になっていました。

私が得たかけがえのないもの。それは、同期スカラーという仲間と友達で先輩みたいな存在。DO-ITという絶対的な味方と居場所があるという安心感。それらが、よりいっそう私を強くしてくれました。これからは、自分のために戦ってみようと思います。





井内 綾乃

Iuchi Ayano
高校生／東京都

願望を諦めに変えないためのアクションを考える

五日間で実感したことは、障害をもつ自分が生きていることを否定しなくて良いということだ。夏季プログラムで印象的だったことは、①障害当事者の方との雑談、②ヘルパーとの距離感、③テクノロジーフィッティングの三つだ。

① これまで学校生活の中で、色々な違和感や障壁を感じてきたが、それらを言語化することは許されていないと感じていた。第一の転機は休み時間や移動時間に先輩スカラーの方やスタッフさんに話しかけていただけだったことだ。経験の共有、当時私がいた社会(学校)にあった問題点の提起、自分の生き方等。相手が親身に聞いて下さったこと、話しても良いと思える環境を作っていただいたことは本当にありがたかった。

② 夏季プログラムの中で楽しみにしていたことの一つが、アテンダントさん及びヘルパーと過ごす時間のことだ。私は、日中は移動の介助として主にアテンダントさんを、朝と夜間は医療的ケア等が必要なため、ヘルパーさんについてもらうことにした。移動では、アテンダントさんに一切干渉されないことに対し、逐一頼むことに戸惑いを感じた。だが、前半二日間を過ごすうちにあることに気がついた。それは、自己決定が行動として具現化されることで肯定感が生まれる、ということだ。この感覚を実感できたことが純粋に嬉しかった。

③ Microsoft社を訪問した日の午後、グループに分かれてセッションを行った。そこで、増やす必要のないと思っていた選択肢が一気に広がった感動は忘れない。あるスタッフさんに誘われたままにとあるツールを試し、「あっ、これが楽をするということなんだ」→「余

計な体力や労力を消耗しないということなんだ」と実感した。私を覆っていた膜の一片がスルスルと引き剥がされ、気がつけばその場にあった数々のツールの虜になっていた。そして、フィッティングが終わるころには「“楽”をするための選択肢を増やすこと」、「願望を諦めに変えないためのアクションを考える」、「自分で自分を型に押し込めないこと」という三つの学びを得ることができた。

修了式で、五日間を振り返った時、心から夏季プログラムに参加できてよかったと思った。私は、今回“教育”にフォーカスしたが、今後は23スカラーとして、個人の関心の追求と、さまざまな人たちとの交流やロールモデルの形成によって、成長できたらと考えている。

この夏を機に、私の中で凝り固まっていた何かを溶かし始めることができています。それは障害のカミングアウトと配慮を求めることだったり、環境のカスタマイズだったりする。DO-ITは「雪溶け」のきっかけを掴んで、「本来の力」を开花させる場所…。私はそう感じた。





澤田 桃

Sawada Momo
高校生／兵庫県

チャレンジすることの楽しさ

私は、DO-ITに参加して、今まで経験したことのないことにチャレンジし、新たな「楽しみ」に出会うことが出来た。

私がDO-ITに参加した理由は、「自分に合ったデジタルツールを見つけること」だった。私は、生まれつき脳性まひで電動車椅子や歩行器を使って生活をしている。日常生活においても、家族や学校の先生、介助員さん、友達のサポートが必要だ。そして、勉強をする上でデジタルツールは欠かせない。黒板を板書する時もWordに打ち込んでいるし、課題をする時も提出まで全てアプリ上で行なっている。しかし、全てのツールが私の体にフィットするわけでもない。今まで数多くの様々なツールや機器を試してきた。しかし、その大半は私の体には合わず上手く使うことが出来なかった。もちろん、DO-ITにあるツール全てが使えるわけではない。だが、今まで知らなかった新しいツールに出会うことで、自分で出来ることがもっと増えるかもしれない。そんな期待を胸にDO-ITに参加した。

今回の夏季プログラムに参加することは、私にとって大きなチャレンジだった。初めて一人で飛行機に乗って東京に行った。ヘルパーさんに手伝ってもらうことも、そして欲しい介助を一から自分で説明することも初めてだった。今振り返れば、「初めて」づくしの5日間だった。最初は、全てのことに自分から発信したり動いたりしなければ、何も始まらないという状況に戸惑ったが、「これが『自立』ってやつなんだ!」と5日間を通して感じる事が出来た。そして、新しいことにチャレンジすることの楽しさも改めて実感することが出来た。

それと同時に、新しいツールにも出会うことが出来た。私は車椅子に座ったまま携帯を操作することが難しい。普段、家などでは床に長座で座り、手首を足に当て支点にして人差し指の第2関節で操作している。しかし、車椅子だと携帯が滑ってしまい、思うように操作することが出来なかった。そこで、スタッフの方に相談したところ、デジタルフィッティングの時に車椅子に取り付けるアームを試させてもらうことが出来た。すると、自分が一番操作しやすい位置で携帯が固定され、床とほぼ同じスピードで操作することが出来るようになった。

私は、この夏季プログラムを通して、「自分に合ったデジタルツールを見つけること」のみならず、「チャレンジすること」の重要性を再確認することが出来た。この先、楽しいことも困難なことも、様々なことが待っているだろう。側から見たら到底乗り越えられないような大きな壁にぶち当たることもあるかもしれない。だが、大きくて高い壁に向き合うことこそが、自分自身を成長させ、まだ感じたことのない「楽しみ」に出会えると私は思う。私は、これからも楽しむことを忘れずに挑戦し続けたい。



1-2 特別聴講生プログラム

テクノロジーコース：小学生

[8月7日(月)]

テクノロジー活用と自分に合った学び方を両輪で考えてみるプログラムとして、小学生向けに「テクノロジーコース」を開催しています。10名が選抜され、東大先端研でiPadを活用したプログラムに参加しました。

●テクノロジーワークショップ

iPadを使って、自分に合った読み書き計算の方法を体験してみました。iPadの読み上げや書き込み、ノートテイク、電卓機能などいろいろな方法を実践してみることで、自分に合った学び方について考えることができました。



山本剛久
TOPPAN



山本弥生
TOPPAN



玉井菜奈
TOPPAN

※読み上げ機器「Yondee!®」を今回試用させていただきました。



●トーク「ようこそ先輩」



読み書きにニーズをもつ先輩スカラーが、自分の学び方やライフスタイルを紹介。自分の困難さどう付き合ってるのか、困ったときはどうしてきたか、生活を楽しく楽するコツなど、実は聞いてみたかったことを、先輩と意見交換しました。

●大学の先生の話聞こう!「宇宙と私たち」



嶺重 慎
京都大学
名誉教授

京都大学の嶺重慎先生をお招きして、宇宙に関するご講義をいただきました。読みやすい資料やさわれる月の模型など、ユニバーサルデザインされた内容に子どもたちも興味津々!早速iPadも活用し、自分に合った学び方を実践することができました。



【参加者の感想(一部抜粋)】

「日本だけではなく世界中に障害者がいてそれぞれみんなが出来る工夫をしている」という事が分かりました。

私だけじゃなかったんだと気づくことができました。

僕と同じように困っているお兄さんやお姉さんの話を聞いて、大学まで頑張っていることに驚きました。僕は大学まで行くつもりはなかったけど、話を聞いて、頑張っているのもいいかなあという気持ちになりました。

自分で調べ物が出来て心が躍った感じがしました。

文字を読んだり書いたりするのが、苦手だけど、iPadの設定をおしえてもらって、宇宙のことを勉強できてうれしかったです。



テクノロジーコース：オンライン

[8月8日(火)]

中学生・高校生を対象に、学びの本質とは何か問い直したり、効率的な学習のためのテクノロジー活用を紹介するオンラインプログラムを実施しました。16名が選抜され、自分の学び方について再考する時間になりました。

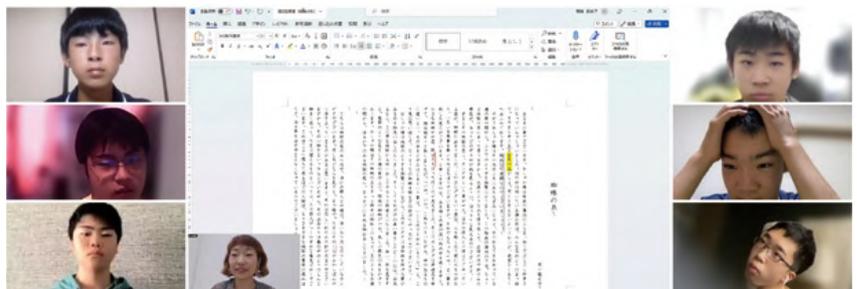
●わくわくテクノロジーの紹介

読み・書き・計算の基本的な学習スキルをサポートするテクノロジーを多数紹介！パソコンやタブレットを活用したノートテイクや数式、作図に役立つアプリやソフト紹介だけでなく、見る・聞くをサポートするアイテムも登場。ちょっとした工夫で学びやすくなる気づきがありました。



●テクノロジーを使って学んでみよう

学ぶとはどういうことなのか、何のために読み・書き・計算を行っているのかなど、「学ぶ」ことの前提から問い直してみました。ChatGPTなどAIを活用した学習についても話題になり、テクノロジーとうまく付き合っていきながら学びを深めていくことについて考えてみました。



[参加者の感想(一部抜粋)]

手書きである必要はない

いろんな人と出会えて嬉しかった。

自分の生活の中で取り入れることができそうだと思います。

図を用いて考える「入力」「出力」はすごく分かりやすいなと思いました。

先輩の話では合理的配慮で学校と揉めている時の対処方法なども教えてくれたので、すごくありがたかったです。折り合いをつけていくという新しい課題が見つかりました。



分かりやすいプレゼンテーションなどの話も聞くことが出来、おかげで自分の心に切り替えをつけることが出来ました。

狭い意味での「書く」ということは、本当の学びとは違い、物事について自分の考えていることや理解していることを伝えるためであることがわかりました。

可能性は最初は、埋もれているかもしれないけど、苦手なことを助ける方法を身につけることで、ひらけると思いました。

ダイバーシティコース

[8月9日(水)]

8名が選抜され、4日目のコンカレントセミナーに参加し、障害に対する考え方や多様性について考えを深める時間を過ごしました。ランチや休憩では、先輩スカラーも集まり、相談や意見交換が行われました。

[スケジュール]

- オープニング
- コンカレントセミナー 1 参加
- ランチトーク
- コンカレントセミナー 2 参加
- コンカレントセミナー 3 参加
- クロージング



オンライン参加

参加者の感想 (一部抜粋)

「自分の体の声を聞く」では話し合いをして学びを深めました。障害を持っていて辛いと思っているのは自分だけではないと感じ、少し心が軽くなりました。「医療との付き合い方」では医療のことについて、母を通して行っているが多かったので自分から直接関わることはほとんどありませんでした。とても役に立ったと思います。「支援者とアドボケートの違い」では、自分が何をできて何ができないのか、伝えられるようにならないといけない。支援者やアドボケートとうまく関わるためには、自分を知ることも大切なだと私は考えています。



澤田 春花
 Sawada Haruka
 中学生/宮城県

貴重な時間が過ごせました。刺激的でとても面白かったです。障がいのある人に会ったことがなく、自分は「ディスレクシアという障がいを持つ、他の子とは違う可哀想な子」だと思っていました。けれど、同じ障がいや、重い障がいを持った人と出会って、今の自分にはなんでもできる気がしました。自分の障がいを理由に、どうせ無理だろうと決めつけたり、勝手に夢を諦めたりしたことがありました。無理だと決めつけていた私が急に恥ずかしくなりました。これからは、自分の気持ちにまっすぐ従って一度きりの人生をより濃いものにしていきたいです。



飯沼 恵都
 linuma Eto
 中学生/東京都

審査時の書類で自分のことをどう説明すればいいかわからなくて難しかったです。面接では、要望をうまく言葉にできなかったのが悔しかったです。また、メールのやり取りでだんだんと自分だけで判断できるようになり達成感があったので良かったです。そして、当日。そこには様々な障害を持った子たちが集まっていて面白いなと思いました。様々な講義でたくさん考えさせられたり自分の意見を持つことができたので嬉しかったです。休憩中に友達と話すことができたのも自分の自信につながりました。様々な体験で勇気と自信を学ぶことができました。



鈴木 琴実
 Suzuki Kotomi
 中学生/愛知県

1-3 夏季プログラム後に行われるスカラーププログラム

DO-IT では年間を通じて、スカラー向けプログラムを開催。定期開催のオンラインミーティング、アドバイザーや先輩等からのメンタリング、インターンシップ、各種イベント等でのスカラー同士や関係者との交流を通じて、多様な価値観に触れ、リーダーシップを育てる機会を得ています。

DO-IT コミュニティへの参加：オンラインミーティング・ギャザリングの開催・参加

毎月、様々なテーマを設定して活発な議論を行っています。アドバイザーや共催・協力企業など、ゲストスピーカーからの話題提供も。口話が難しい場合にはチャットや音声合成を利用する、話を耳で聞いて理解したり、内容を頭のなかで整理するのが難しい場合は、文字通訳で会話を文字として読んで理解する、文字を目で見て読むことが難しい人は読み上げを活用する等…様々なコミュニケーション方法が飛び交うユニークな場です。



2023 年度：オンラインミーティング・ギャザリングのテーマ

4月	今年の目標とやりたいこと
5月	入試と配慮
6月	2023夏季プログラム案内、ギャザリング
7月	過年度スカラープリプログラム
8月	夏季プログラムの振り返り
9月	ようこそ2023スカラー！
10月	インターンシップを活用する
11月	公的な介助者について話そう
12月	ギャザリング
1月	自分のからだところとの向き合い方
2月	働くを語ろう
3月	ギャザリング

イベント参加

今年度は、9月開催「国際福祉機器展 (H.C.R.2023)」に参加し、様々な支援機器の体験、ブース担当者との意見交換の後、参加者同士で情報交換の時間をとり、考えを共有しあいました。賑やかな会場内での聞こえを補償するため、フォナックのヒアリングエイドを活用させていただきました。国際福祉機器展 <https://hcr.or.jp/>



個別相談、インターンシップ

スカラーが日々経験する社会的障壁の解消に関する個別相談は、スカラー自身の活躍を広げることはもちろん、社会的包摂の芽を育てる大切な機会です。セルフアドボカシーの実践や、アセスメントを通じたアドボケイトとの協働の機会にもなっています。インターンシップも、企業とともにスカラーが協働し、働く場のインクルージョンを試行錯誤する機会になっています。



2

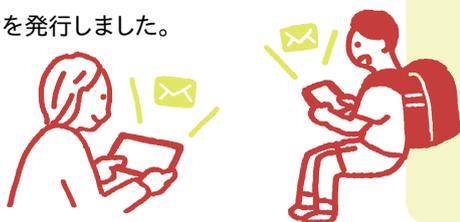
パルプログラム

パルプログラムは、情報発信を目的とした登録型プログラムです。障害のある本人とその保護者が登録できます。各月のテーマに沿ったパル向けのメールマガジンの発行と、パル登録者向けのセミナーを開催しています。

登録者の情報 総計：4,239名 (2024年2月末集計) 海外も含む全国から登録がありました。

パルメールマガジンの発行

DO-ITに寄せられる質問とその回答、事例紹介やコラム、イベントレポートなどを記載したメールマガジンを発行しました。



2023年度 パルメールマガジンの例

DO-IT Japan: DO-IT パルメールマガジン 112号

【配信内容】

- (1) DO-IT Japan 事務局：年末年始の休業期間のお知らせ
- (2) 活動レポート：DO-IT2023年一般公開シンポジウム
- (3) 事例：介助が必要な人の就労について

パルセミナーの開催

DO-IT Japanの活動紹介、学校での合理的配慮に関する社会情勢の現状、テクノロジーを活用した学び方の例、学校との対話の方法などを紹介しました。セミナー後半ではスカラーが登壇し、幼稚園時代や小学校から現在までの学び方の変化、助けになった社会資源、今後に向けてチャレンジしていることについて話題提供いただきました。

【話題提供】



森田康生
2021 スカラー



【日程】2023年12月23日(土) 13時～16時

【開催方法】Zoomによるウェビナー配信

【テーマ】自分に合った学び方とは？

【第1部】挨拶・話題提供

・オープニング

13:00-13:05 挨拶：近藤 武夫(DO-IT Japanディレクター)

13:05-13:20 DO-IT Japanの活動紹介：脇山輝衣菜(DO-IT Japan事務局)

・話題提供&質疑応答

13:20-13:50 多様な学習方法と学びを支える環境整備における最近の話題や事例：近藤 武夫(DO-IT Japanディレクター)

13:50-14:20 DO-ITで紹介するテクノロジーを活用した学び方の例：奥山 俊博(DO-IT Japan事務局)

14:20-14:40 質疑応答

【第2部】トークセッション「自分にあった学び方とは？」

15:00-15:40 話題提供 and トーク：森田康生さん(2021スカラー)、奥山 俊博・脇山輝衣菜(DO-IT Japan事務局)

15:40-15:55 質疑応答

15:55-16:00 閉会の挨拶

パルプログラム登録



登録は DO-IT Japan ウェブサイトより常時可能です。(インターネット上で登録できます)

パルプログラム登録ページ
へアクセス！

登録フォームに
参加者情報を登録

登録したアドレスに
完了メールが届けば完了



3

DO-IT Japanの様々な活動

DO-IT Japanの活動と活動を通じて得られた知見をできるだけ多くの方へ届けるため、ニュースレターの発行やイベントの企画・運営を行っています。

ニュースレターの発行

DO-IT Japanの活動をお知らせするニュースレターを配信しています。DO-IT Japanに関心をお持ちの全ての方が登録できます。ウェブサイトから常時登録することができ、約2,500人の登録をいただいています。

こちらから登録
いただけます
→



一般公開シンポジウムの開催

一般公開シンポジウムでは「中等教育(中学・高校)のインクルーシブ教育」をテーマにオンライン開催しました。小学校と大学でのインクルージョンが進みつつあり、2024年4月からは私立学校での合理的配慮の提供も義務化も開始。そんな中、歴史的・制度的背景から特に課題が残されているのは中等教育段階。シンポジウムでは文科省からの現状に関する情報提供のほか、登壇したスカラーから中高での経験を振り返って意見を聞き、今後の中学や高校でのインクルージョンのあり方について、フロアを交えた討論を行いました。



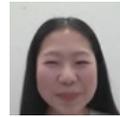
話題提供



嶋田孝次
文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課 課長補佐



大須賀一樹
2017 スカラー



脇山輝衣菜
2017 スカラー



藤原收望
2019 スカラー

【日程】2023年12月9日(土) 13時～16時

【開催方法】Zoomによるウェビナー配信

【第1部】挨拶、DO-IT Japan 紹介

13:00-13:05 挨拶 DO-IT Japan ディレクター 近藤武夫

13:05-13:25 DO-IT Japan プログラム紹介
& 2023年夏季プログラムの報告

13:25-13:45 本シンポジウムの問題提議・趣旨説明

【第2部】話題提供・質疑応答

13:50-14:10 文部科学省より話題提供

文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課
課長補佐 嶋田孝次氏

14:10-14:20 質疑応答

14:20-14:50 スカラー3人より中高の経験について話題提供

1) 大須賀さん (2017 スカラー / 大学生)

2) 脇山さん (2017 スカラー / 大学院生)

3) 藤原さん (2019 スカラー / 大学生)

14:50-15:00 質疑応答

【第3部】ディスカッション

15:15-15:45 登壇したスカラーとのディスカッション

15:45-15:58 フロアとのディスカッション、質疑応答

15:58-16:00 閉会の挨拶

DO-IT Japan 説明会の開催

たとえば、進学先を選ぶこと
体調・体力と、学習方法、私が学びたいこと、
折り合えるところを探していった。

- 高校 昼夜間定時制・単位制課程
- 大学 夜間部 (イブニングコース)
- 大学院 昼夜間開講

自分が知らない・諦めているだけで
やっていないことが多いことに気づいた

挑戦していなかった自分への焦りややる気が湧いた

DO-IT Japanの活動やプログラムへの応募に関心がある方へ向けて、毎年、説明会を開催しています。説明会では、DO-ITの活動内容の報告や、翌年度のスカラープログラムへの応募要領についての説明と質疑応答のほか、スカラー2名をゲストに招き、これまでの学校での学びや、DO-ITでの体験について、経験談を聞かせていただきました。

スカラープログラムへの応募を考えておられる方は、ぜひご参加ください。説明会の開催(開催日時・参加方法等)については、ウェブサイトをご覧ください。

【日程】2023年3月25日(土) 13時～16時

【開催方法】Zoomによるウェビナー配信

13:00-13:30 挨拶・DO-IT Japan 活動紹介

13:30-14:30 スカラーからの話題提供

鈴木悠太さん(2022 スカラー/高校生)

河高素子さん(2013 スカラー/大学院生)

14:45-15:10 応募説明「DO-IT Japan 2023 スカラープログラム」

2023年度の応募方法、応募に関する質問に回答いたします。

15:10-16:00 質疑応答

閉会・スカラーから参加者の皆さんへメッセージ

話題提供



鈴木悠太
2022 スカラー



河高素子
2013 スカラー

※応募の詳細や説明会の
案内はこちら▶



共催
プログラム

インターンシッププログラム

企業での DEI (Diversity, Equity, Inclusion : 多様性、公正、包摂) の意識が国内外で高まっていることから、障害を含めた多様な人々がインクルーシブに活躍できる職場や企業のあり方について、社会的な関心が高まっています。DO-IT では、志をともにする共催企業とともに、インターンシップを通じたスカラーおよび関わる人々すべてが学びあうことができるプログラム実践を行っています。

【配属先】
消費者市場戦略本部 (Analytics and Insights)
(遠隔・出社併用参加)
【勤務期間】
2023.5.29 ~ 2023.6.15 迄
※月～金曜日、週当たり 20 ~ 25 時間程度、
有償 (週 3 程度の出勤あり、その他はテレワーク)
【業務内容】
納品・POS データなどの大規模データの分析を
通じた更なるビジネス機会の発見と品揃えの提案



小田 光明
Oda Komei
2016 スカラー

テーマ

P & G ジャパンの皆さんとのインターンシップでは、受け入れ部署とそこでの職務や達成目標を明確にした上でインターンとして業務に携わるほか、働く場をともにする同僚である社員の意識とその変容についても注目したインターンシップ・プログラムを実施しました。



橋爪 崇弘
Hashidume Takahiro
P&G ジャパン



松下 結妃
Matsushita Yuiki
P&G ジャパン

インターンシップ学生からのコメント

■ 動機・目的

「社会人」という立場で、「何をどこまでできるか」自分の現在地を知りたかったです。自身の現在地を知ることで、就労時にどのような支援を求め、工夫ができ、役割を果たせるかを整理し、的確に表現できるようになりたいと思いました。自身の障害等が就労に与える影響等を把握したり、職場(企業)から、自身への疑問、要望等を知ること行いたかったです。障害の有無以前に就活生として、何ができるか、したいかも気になりました。

■ 準備

志望動機、自己 PR、質問等をまとめて面接に備えました。面接後は、Teams やメールを用いて先方と打合わせを行いました。

■ 自宅での勤務の様子

初日は勤務に対し尊重すべき基本的価値観に触れ、担当業務、取り扱うデータ取得に必要な基礎知識等の座学研修を行いました。また、年齢の近い社員さんとお話する機会を得ました。

出社は、オフィスで社員さんと同じ場所で勤務をしました。業務を進めると不明点も多く出てきましたが、直属の上司の方、社員の方に丁寧にアドバイスをいただき、勤務できました。

テレワークは、Teams を用いて勤務しました。勤務場所を選ばず集中して業務に取り組みました。

対話開始



マッチング

面接
(オンライン)

- ・業務内容の説明
- ・配慮事項の確認

採用

準備

勤務期間

インターンシップ担当者からのコメント

その後面接(オンライン)を行い、業務内容の説明、配慮事項の確認を、インターンシップ担当者として話し合いを行った。

- ・依頼業務の想定を実施に対する想定時間やスキルの確認
- ・学生へスキル確認
- ・面接、事務手続き(エントリー登録、適性検査、業務に必要な機材の準備等)の連絡

■ 準備内容について

障害特性による必要な配慮事項だけでなく、まずは当該学生がどのような仕事になぜ興味があるのか、個人のキャリアに関する興味関心事を率直に話し合い、出来る限り職務を通じて自らの成長を感じ、楽しめる環境の整備を心掛けました。初日から1週間程度実施した研修においては、部署全体の紹介や、部署全体として達成したい目標、その中で当該学生が従事する業務がどう繋がっているのか...等、組織・ビジネス両面の背景を説明し、当該学生が当事者意識と成果物イメージを明確に持ったうえで従事できるよう準備を行いました。受け入れ担当社員以外にも部署内の若手や役員との意見交換が出来るよう、分析過程や提案事項について壁打ちする機会を設けたりして、リアルな職場体験を再現できたのではないかと考えています。

まず「自身は社会人として働いてみたい」と思いました。それは、仕事そのものが興味深かったと共に、全力で物事へ挑戦できる環境が社会人にあると思ったからです。

また「自分自身と就職先の相性」を知ることも重要であると思いました。「就労」において、企業が「障害」の全てを把握していることはあり得ません。ですので最初は互いに合致しているとは言えない支援や工夫を試みる事になるでしょう。しかし、継続してコミュニケーションが取れ、日々互いにより良い「働き方」の構築を目指し続けられる企業であれば、双方に充実した就労環境が生まれると思いました。

(小田光明)

「インターンシップを終えて」

障害のある学生のインターンシップだからと言って、特別なことをすべきだと認識していること自体に無意識の偏見があると気付かされました。お互い率直に意見交換を行い、特性上助けが必要なところは一部手助けをしつつも、本人ができることは完全にお任せできていたので、私たちもとても働きやすかったと感じています。

一方、彼自身が業務時間外も慣れない作業に時間を費やしてくれていたことは事実です。そのため、実際に就業を開始した後のことを考えると、過重労働にならない、かつ本人のスキルアップにつながる就業環境を整備するために、より綿密に「何に・どこまで時間をかけているのか」等を精査する必要があるかもしれないと感じました。(橋爪崇弘・松下結妃)

4

スカラーたちの活動／インタビュー

スカラーの紹介として、インタビューを行っています。今回3つのストーリーを記録しています。大学生活で休学を選択したスカラー、夢を叶えるため大学進学する・大学進学したスカラーが、それぞれの視点で自身の活動内容や魅力について語ってくれています。後輩へのメッセージもいただいています。

「心が楽になるきっかけ」

【休学中の活動】についてインタビューしました



渡辺 陽

Watanabe Minami
大学生／兵庫県

自己紹介をお願いします

私は膠原病系と神経系の病気があって、一番辛いのが全身の関節があちこち痛むことです。それから、字を書くとき手が痙攣するので、筆記を避けています。移動は電動車いすが多いですが、元気なときは体調と状況と体力の配分を考えて、徒歩など移動手段を変えています。

学部では社会福祉を中心に勉強していますが、2023年度の1年間は休学しました。4月から復学します。

休学を選んだ理由を教えてください

大学に進学してから一人暮らしをしています。入学当初、「困ったら大学で出会う友達に頼ろう」と思っていたのですが、コロナで人間関係を上手く広げられず…。そうして1人で耐える生活は段々崩れていって、学業にも影響が出ていきました。また、社会福祉士実習の配慮について関係各所と十分に対話できていなくて困ってもしました。このままで4年生にはなりたくないと思って、先輩やスカラーに相談する中で、3年生の夏に休学を意識し始めました。親にも想いを伝えて、結果2023年の4年生になる時期（春）から休学をしました。

休学を選んでみて、結果どうですか？

総括すると、良い時間でした。現時点で成したことは多くないけど、色んなことをしました。特に福祉関係などの申請を沢山したので、それぞれの書類の用意はすごく頑張りました。それから、学会などに行って、沢山の人と出会って、大

学の中だけでは得られないことに触れて、復学やその先でやりたい自分像を作っていました。

休学中は、どう過ごしていますか？

休学して最初にしたことは、ヘルパーに来てもらうための申請です。支援区分の判定を待つ時間はドキドキしました。結果、家事援助で入ってもらえたことで、生活環境を立て直していけました。

社会福祉士実習に関しては、学内での調整役の方を確保しました。実習先を見学して、困りそうなことを洗い出したり、身体のことをどう説明するか、という検討が出来ました。また、いくつかアルバイトもしました。企業でのお仕事では、一般的な働き方（5日間8時間労働のような）はやっぱり難しいんだと自分のキャパシティを確認する経験ができた気がします。連日フルタイムで働くと、動けなくなって他の事がなにもできないんだって痛感しました。

復学したときに心がけたいことはありますか？

4年生では、まず大学院入試を受けます。それから社会福祉士の実習があって、卒業論文、最終的に国家試験を受けます。生活が崩れると方々に影響が出る、と身をもって学んだので上手にヘルパーを活用して生活していきたいと思っています。一番注力したいことを見定めて、体力の配分に気をつけることも大事にしたいです。

後輩へメッセージをどうぞ！

私の生活の崩れ具合は、話すことをためらうくらいのものでした。けれど、周りの人たちに恥を忍んで話したら、ライフハックを教えてもらえたり、意外と「生活できているように思うよ」と言われたりしました。そうして、自分の許せる生活水準を客観視することは、心が楽になるきっかけにもなり得るんだと気づきました。

何でも崩れないことが理想です。でも、行き詰まったら小休止して、苦しくない範囲で人に話せると何かしらの気付きが生まれるかもしれません。そこから立て直しは始められると思います。私自身、まだまだ半端者です。なりたい自分に向けて、一緒に前進していきましょう！



「学習が必要ないと思ったことは一度もありません」

【高校生活、大学進学の様子】についてインタビューしました



森田 康生
Morita Kosei
高校生／愛知県

自己紹介をお願いします

重複障がいのため、考えをまとめることや言語化することに困難があります。また、手先に振戦があり書字が乱れ時間がかかります。文章を読むときには、PCの読み上げ機能やAccessReadingを使って目と耳で読んでいます。書字については、PCでノートイクをするか、記入枠を大きくしてもらっています。

高校を夜間の定時制に決めた理由を教えてください。

日中の時間が自由に使えるからです。通院時間や予習復習の時間を確保することで、体調と自分の学ぶペースを調整してきました。定時制高校は4年間で高校を卒業するため、僕にとっては無理のない枠組みで学習することができました。

高校ではどんな配慮を得て勉強していますか？

授業は、PCを利用しました。AccessReadingの使用、板書の撮影を配慮として認められました。数式やグラフ、漢字を書く際には、Goodnotesを使いました。また、古典ではAccessReadingで読み上げると歴史的仮名遣は誤読が発生するため、OneNoteの録音機能を使用して、授業中に先生の音声を録音していました。定期考査では、時間延長と別室受験、問題用紙の拡大とPC解答を配慮として受けました。

大学の進路を決めたきっかけはなんですか？

小学生の頃、大河ドラマ「真田丸」をみて歴史が好きになりました。実際に真田丸があったとされる場所に立った時の感動は、今も忘れられません。興味のある事柄を調べていくうちに、歴史上の人物が書いた古文書を自分の力で読めるようになっていこうと思うようになり、そのためには大学で学ぶ必要があると思ったのがきっかけです。

夢に向けて受けた試験があったんですね。

中学校1年生から歴史検定を受験して、3級までは全問マ-

ク式だったので時間内に解けました。しかし、日本史2級からは記述式解答が加わるため、検定側に時間延長とPC解答の配慮を求めましたが、時間延長を認める一方で合格証は発行できないと言われました。その年は合格できなかったのですが、翌年に再チャレンジし、同じ配慮を求めたところ、PC利用は認められませんでした。時間延長と別室受験を利用し、問題用紙のページめくりを介助してもらいました。その結果、合格することができ、合格証を受け取ることができました。

大学入試の配慮申請内容と、実施した項目を教えてください。

ポートフォリオ入試を受けました。求めた配慮は、車での送迎、電動車いすの使用、時間延長1.5倍、持参したiPadで解答、用紙の拡大、リスピーク(※)支援です。

当日の試験では、課題に対するディスカッションや面接があり、試験の特性上時間延長は認められず、それ以外の配慮と拡大鏡、自分の意見を文章化したものを印刷するために必要なモバイルプリンターの持参は認められました。

(※) 言った言葉が不明瞭だった場合、人が言った言葉かわりに再度発話すること

配慮を受ける前の事前準備として必要なことは？

配慮は自分が必要だから求めるものです。しかし、「発話が不明瞭です」と言っても、どの程度なら伝わるのか、どこまでの支援が必要なのかは、実際の生活の中で支援者と共有する必要があると思っています。高校生活までと同様に大学生活においても、まずは僕の状態を回りの人たちに知ってもらうことから始めて、本当に必要で活きた配慮を、回りの人と一緒に考えることが、配慮を求める自分の役割だと考えています。

大学に入ったら、まずどんなことをしたいですか？

進路を決めるきっかけでもお伝えしていますが、まずは古文書に書かれているくずし字を学びたいです。春からは学生寮に入るので、いろいろな地方の友だちとたくさん交流したいと思っています。

後輩へメッセージをどうぞ！

僕はこれまでの人生の中で学習が必要ないと思ったことは、一度もありませんでした。文字が読めたり、計算ができたりした時の手ごたえが、自分のやりたいことに進むときの不安や迷いを打ち消してくれました。現在も知的な困難はあり、これから始まる大学での学びにも不安はありますが、僕には好きな言葉があります。それは「あきらめなかった者のみにこそ道は開ける」という言葉です。皆さんも不安に打ち勝って、やりたいことに挑戦し続けてください。



「成功するまでやる！」

【中高の様子、大学生活】についてインタビューしました



藤原 收望

Fujiwara Motomitsu

大学生 / 鹿児島県

自己紹介をお願いします

東京藝大の絵画専攻に所属しています。読み書き等多くの困難を持っています。生活で一番困るのが、極端に文字を記憶できないことです。読むことに時間がかかり、読み間違いや読み飛ばし等、音読は特に辛いです。しかし知識欲は旺盛なので、興味ある本や資料は自分なりに時間をかけて吸収しています。

正直まだ自分自身のことがよくわからない部分もありますが、最近は自分のちょっとした特性と絵画の表現世界が一致してきて、自分が何故、絵画に惹きつけられているのか疑問に感じていた部分が「自分の脳内は全ての物を単一的にみていて、物事に優劣がないフラットな世界が存在している。しかし、一般的に物事には順序を定める必要があるため、物事の始まりを見定める必要性に最近気づき始めた」。いわゆる「プリミティブ」これが僕を形づくっているんだなと思っています。

中学校、高校での配慮を教えてください。

主に注意欠陥と読字障害を防ぐために、配慮を受けました。中学は、別室、時間延長、問題用紙と書く用紙の拡大、読み上げ(代読)です。高校は、中学で受けた配慮に準じ、加えPC利用と可能な限りの合理的配慮をお願いしました。大学は、大学入試・入学時にも、大学側から出来る限りの合理的配慮を提供する旨のご連絡をいただき安心して入学できました。相談室等の対応もしっかりしてくださっています。教授達から「君は君のままで良いんだよ」と仰っていただけは涙が出そうなくらい嬉しい気持ちでいっぱいになり、頑張っ自分の希望する大学に入学出来て、学びたい事を学べる喜びを改めて感じますし、これからも頑張っていくと思えます。

芸術の道を目指そうと思ったきっかけはなんですか？

中学時、絵のうまい先輩に出会って、生き方として格好良

いと思ったからです。また、自分の中の純粋性を保っていられる分野が芸術でした。その後本格的に美術を極めるため、地元の美術科がある高校に進学しました。

芸術と勉強の両立は難しかったですか？

美術に専念しました(笑)。勉強は卒業ができる範囲で頑張った感じです。でも、勉強も結局絵に繋がってくるので、これ美術で使えそうだなあと思いながら授業を聞いていました。

書いた絵はどこかで出展されたりしましたか？

高校で出展し、いくつか賞をとりました。例として、吉井淳二記念大賞展(高校生の部)で、大賞の吉井淳二賞、KTSナマイキVOICEで、青木野枝賞を受賞しました。高校生国際美術展では、内閣総理大臣賞を受賞しました。

大学入試の配慮申請の内容を教えてください。

共通テストでは、3教科(国語、英語、倫理)を受けました。求めた配慮は、時間延長(1.5倍)、別室、チェック解答、問題用紙の拡大、読み上げ(代読)、リスニングの音とめ方式です。二次試験は、一次がデッサンで、二次が油絵を書くことでした。求めた配慮は、何かあった時を考慮して、読み上げ(代読)、別室を依頼しました。配慮を求めることによって安心感が全然違いました。実技とはいえ試験なので、もしものときに対応ができなかったら困るからです。油絵の試験では、モデルさんが中央にいて、朗読を聞いて絵を書く試験を受けました。これが自分で読む課題だった場合、代読者が必要だったと思いました。

大学に入ってみてどうですか？

創作意欲が沢山溢れています。やりたいこと、表現したいこと、成し遂げたいこと、全てにおいて希望に満ち溢れています。作品をつくること、考える事が楽しくて仕方ありません。個展も今年やりたいと希望しているのと、公募展にもいくつか出したいと思っています。一人暮らしを始めて、新たな友人関係ができて難しさも感じつつ、楽しみも感じています。自由を謳歌しています。

後輩へメッセージをどうぞ！

どんな場面であったとしても成功するまでやる!と決めた事ならば、それに向かってやり遂げるための努力や結果でしか満足感、心の報酬は得られないと思う。そしてそれはただ咄嗟に思いつきで持つようなものではなく、常に心に秘めている熱い思いであって欲しい。崖っぷちを楽しもう!!!煌めけ!! Teens Boy&Girl!!



6

共催・協力・後援

DO-ITでは共催企業の皆様と連携したプログラムの運営や企画開発を行っています。協力企業や官公庁の皆様からも、運営の一部にご支援や応援をいただいています。個人からの寄付を通じてサポートして下さる皆様にも支えられています。2023年度の共催企業、協力企業、後援、サポーターの皆様をご紹介します。(50音順)

共催企業



日本マイクロソフト株式会社

夏季プログラムに参加する2023スカラーが、最も関心のあるセッションの一つに毎年挙げているマイクロソフト社サイトビジット、数年ぶりに現地への訪問が復活です！マイクロソフト社の皆様とDO-ITが学びのプログラムを作成し、品川本社のオフィスを会場に、最新のテクノロジーや生成AIによる未来の学び方や働き方を学ぶセッション、最高技術責任者である野寄弘倫さんによる特別講義、そしてオフィスツアーを実施いただきました。ノベルティグッズ等のご提供もいただきました。

ウェブサイト↓



P&G ジャパン

障害のある人の職業での成功を支援する研究分野では、「職業準備性」と呼ばれる障害者側のスキル育成について注目が集まりがちですが、障害のある人とともに働くことで、周囲で同僚として働く人々にどのような意識や行動の変容が期待されるのかも重要な要素です。実際にインターシップ・プログラムを通じてともに働くプログラムを運営しつつ、社員の側の意識変容をもたらすものは何かを検討する「Disability Confidence Survey」の開発と実施を行いました。

ウェブサイト↓



後援

厚生労働省

文部科学省

一般社団法人コペルニク・ジャパン

途上国の抱える社会課題や環境問題を見極め、その解決策を見つけ、その効果を実証した上で展開を支援するコペルニクの皆さんに、どのように課題解決を行うかを学ぶ講義を提供いただきました。世界中に存在する社会課題に私たちが取り組むために必要なことは何か?について議論しました。



オムロン株式会社

日本の障害者雇用の黎明期を支えたオムロン社と太陽の家の連携から始まり、現在のオムロン社が取り組む「人と機械の高度協調」が実現している障害のある人々を包摂した働き方について学ぶ講義をご提供いただき、インクルーシブに働くことについて議論しました。



株式会社 atacLab

自分の読み書きの速度を同学年の標準値と比べて客観的に評価できる「URAWSSII」等をご提供いただきました。時間延長やタイピング入力の配慮を求める際に、エビデンスを持って他者に説明する重要性を学ぶためのツールとして使用させていただきました。



株式会社カプセルアシスト

プログラムやイベント等で「遠隔文字通訳」を実施していただきました。音声での会話をリアルタイムに文字にすることは、発達障害など、聴覚障害以外の障害から聞こえに困難を持つ人々が、会話の流れを把握するためにも便利に活用できることを教えていただきました。



株式会社リコー

自分を取り囲む全ての景色を撮影できる360度カメラ「RICOH THETA(リコーシータ)」について、及びTHETAを使って世界の社会課題を可視化する取り組み(一般社団法人コペルニク・ジャパンとの協働)についての講義を提供いただきました。



合同会社 nicomo

車いすといえば「段差が大変」...しかし、段差や悪路を乗り越えて、自由に走ることができる車いすもあります。夏季プログラムで、さまざまな機能のある特殊な車いす製品を貸与いただき、行きたい場所に行くことの可能性を広げる体験を行いました。



GKデザイングループ

共同研究者として参画するインクルーシブデザインラボラトリーにおいて、STEM分野で障害のある学生や研究者のため、アクセシブルな実験室のデザインを検討されています。夏季プログラムでは、科学実験ワークショップ時に実験用仕器のプロトタイプを活用させて頂きました。



ソフトバンク株式会社

夏季プログラムでは、小中学生が参加する学びのプログラムや、遠隔から参加する参加者向けの情報保障など、さまざまな場面でタブレットやスマホが大活躍します。プログラム実施のため、参加者用に「iPad」やスマートフォンを貸与いただきました。



TOPPAN 株式会社

夏季プログラムに参加する小学生向けに「絵本のページをめくると、その中身が流暢な声で読み上げられ、聞いて楽しむことができたなら...」を実現する読み上げ機器「Yondee!®」を使って、今までとは違う読書を体験するプログラムを提供いただきました。



トヨタモビリティサービス株式会社

車いすでスムーズに乗降できる機構を持った車で自由に移動できる機会や、それが手軽にレンタルできるサービスがあることを知ることは、将来の生活を広げるイメージを持つ上で重要です。夏季プログラムに複数台の「ウェルキャブ(福祉車両)」を貸与いただきました。



フォナック補聴器

難聴等により聴覚情報処理に困難さのある参加者にとって、聞こえを助けるテクノロジーの存在は、学びができるか否かを左右する重要なポイントです。夏季プログラム等に、デジタルワイヤレス補聴援助システム Roger(ロジャー)シリーズを貸与いただきました。



— DO-IT Japan をサポートしてくれている人々 —

- 講師・話題提供者 / 35名 (7大学、13企業・団体)
- 大学生チューター・アテンダント / 23名 (チューター9名、アテンダント14名)
- スタッフ・アドバイザー・ボランティアスタッフ / 39名 (12大学、10企業・団体)

その他、多くの方のご寄付・ご協力をいただいております。深く感謝申し上げます。

